

Title	James L. O'Neil, The origins and development of ancient Greek Democracy
Sub Title	
Author	真下, 英信(Mashimo, Hidenobu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1996
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.66, No.1 (1996. 9) ,p.135- 137
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19960900-0135

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

James L. O'Neil;

The Origins and Development of Ancient Greek

Democracy; pp. ix+189

Lanham, London 1995 ISBN 084767956 X

真下英信

本書は、紀元前二千年期から現代に至るギリシャ史を従来の如く個々の専門領域に限定することなく、いわば学際的研究の公刊を目的に始められた Greek Studies: Interdisciplinary Approaches の一冊として上梓された古代ギリシャの民主制の通史である。

これまでの古代ギリシャの民主制の研究は、ほとんどアテーナイのそれに限定されているくらいがある。しかし、本書は、表題からも推測出来るように史料により知られる限りの国々の民主制を考察の対象にしており、しかも考察年代は民主制の起源から、ローマ帝政期に渡っており、古代史のみならず民主制に興味を持っている読書者にも頗る有益と思われるので、ここに紹介したい。

著者は、まずアリストテレスの考察を基に民主制を大

きく二つに分類する。第一型は、権力が諸役人に分散しており理論上個々の市民の影響力は減少しているもので、その典型は、具体的には、前五世紀後半のアテーナイの民主制、アリストテレスの言う究極の民主制である。第二型は、権力が少数者の手中に在りもっぱら効率を旨にしている。前四世紀以後は、この傾向が強い(序言)。

暗黒時代から古拙期にかけて民主制が出現することになった契機は、貴族勢力の衰退であった。この衰退原因は、海上交易の発達と貴族の内訌にあった。これは、貴族支配の終焉を意味しなかったが、経済力と重装歩兵として獲得した軍事的役割を背景に非貴族勢力が参政権を要求していくことになった。こうした時代変化を背景に、スパルタではリユクルゴスが、アテーナイではソロンが

改革を実施、民主制への基が成立した。これらの改革で、スパルタはアテーナイと異なり、全市民に参政権を与えなかったことが後の両国の政治体制の相違の原因となった。

この他、メガラ、キオス、キュレネー、ナクソス、アルゴス、シラクサ、コルキュラ等の民主制が論じられている。これらの諸国の国制は不詳故、一般の概説書ではあまり言及されていない。この点、本書は極めて有益である(第一章)。

前五世紀末までには、クレイステネスが定めたアテーナイの民主制を手本にして全ギリシャに民主制が普及し、民主制の思想も確立した。このクレイステネスが確立した第一型民主制と中間形態の民主制が如何にギリシャ世界に広まったか、デロス同盟下の諸国を含めて次に論じられている(第二章)。

他方、前五世紀、一連の改革を通じてアテーナイはアリストテレスの言ういわゆる究極的民主制を完成させていった。ここで、日当制度、役人の抽選制度によって平民は政治的に貴族と対等に国政に参加出来るようになった。前五世紀にこの民主制を確立したポリスは、アテーナイ、コルキュラ、シラクサで、いずれも人口が多く海

軍国でしかも商業が発達していた(第三章)。

ペロポネソス戦争を経て前四世紀になると、民主制はアテーナイなどギリシャ本土やロードスを除いて衰退していく。しかも、本土の民主制も政治運営の効用を求めて変化していき、少数者が支配する第二型の制度に近づいていった。すなわち、役人は抽選に代わって再び選挙され再任も許容されるようになっていった。加えて、前四世紀中頃にはマケドニアの影響もあって寡頭派勢力が台頭した。ただし、この動向は、政治的理念ではなく打算に基づいていたので、アレクサンドロス大王の死とともに消え、再び民主制が広まっていった(第四章)。

ギリシャ本土では民主制の伝統が強く残っており、マケドニアの支配に反抗し民主制を復活させていった。しかし、このヘレニズム時代の民主制は前五、四世紀のそれとは異なり、市民中心ではなく少数の有力者が政治の実権を掌握していた体制であった。すなわち、役人の力は強くなる一方、市民はより貧困となり政治に参加しにくくなっていった。ローマの支配下、民主制の名は残っていたが、すでに自治もなく市民支配の実体は完全に無くなっていた(第五章)。

では、ヘレニズム時代に発達した同盟組織、例えばア

イトリア同盟、アカイア同盟に於いて、民主制は如何なる機能を果たしたのであるうか。著者によれば、一部に寡頭的体制が認められるが、同盟組織は、基本的には民主制であった。例えば、同盟諸国の一票の重さの平等化、役職の輪番制等が試みられた。ヘレニズム時代の同盟組織の失敗は、制度に起因するものではなく、ローマの力の政策に屈服したためである（第六章）。

以上の簡単な紹介から判るように、類似した表題を持ちながらも思想史に重点を置いた C. Farrar, *The Origins of Democratic Thinking* (Cambridge U. P. 1988) とは異なり、本書は制度史的な研究書である。そして一般の概説書には往々欠けているポリスの民主制についても、史料の知られている限り考察が為されているので、古代ギリシャ史の研究を志す初心者にとっても頗る有益な書である。ぜひ、一読を勧めたい。

ただ、評者が一読して、本書に不満がないわけではなかった。

まず、著者は、政治的エリートとか屢々エリートと言う語を用いている（例えば、三十一、百二十、百三十六頁）。しかし、その概念は規定されておらず、文章に曖昧さが付きまとう結果になっている。

また、民主制の「起源」と言う表題にこだわると、ギリシャの民主制の起源が精緻な理論をもって説明されているわけではなく、かなり一般的な政治的、経済的な説明に終始しており、物足りなさを感じる読者が多いのではないだろうか。何故ならば、著者が指摘している中産市民の富裕化や支配者階級たる貴族の内紛等は、人類の歴史に繰り返し現れている現象であって、必然的に民主制を現出させているわけではないからである。

評者が思うに、民主制の起源を考察する時には次の二点の解明が不可欠であろう。J. R. ヒックスが述べているように「あらゆる集会は潜在的に危険なものである」（新保博／渡辺文夫訳 『経済史の理論』六十二頁講談社学芸文庫）。この集会をギリシャ人は何時、どの様にして、何故持つことになったのか、まず解明されねばならない。そして、彼等は何故「雄牛を棒でつつかるときに危険」（ケネス・ドーバー、久保正彰訳 『わたしたちのギリシア人』三十四頁 青土社）を冒せたのか、が問われるべきであろう。（一九九六・三・一七）